益城のがまだしもん！

献身的に奉仕する人たち。夢へと向かって進む若者。二人三脚で汗を流すご夫婦。そんな多くの人たちの"がまだし"がまちを元気にします。そこで、「益城のがまだしもん」をご紹介します。

視覚障がい者にも町の情報を届けたい

益城町音声訳ボランティアこまどり

左から田邉小夜子さん（安永３町内）、池田信子さん（古閑）、吉田君子さん（寺中）、西本礼子さん（安永２町内）

声を届けるボランティアの結成

広報ましきをはじめ、社協だよりや議会だより「清水」などを音声に変え、視覚障がい者に届けるボランティア活動をしている「益城町音声訳ボランティアこまどり」。現在の15人のメンバーのうち、４人にインタビューしました。

「結成は平成９年10月。故・荒木敏子さんが、働く婦人の家主催講座『ボランティア朗読』受講修了者たちに、『広報ましきを視覚障がい者に届けよう』と呼び掛けたのが始まりです」と話してくれたのは、結成時からのメンバー田邉さん。「あれから20年以上経ちますが、音声訳を出さなかったことはありません」と胸を張ります。

「当時の媒体はカセットテープ。90分しか入らないので、内容を選びながらの録音でした」と吉田さん。池田さんが「間違ったらその箇所を消し、正しい文に読み替えるのがたいへんでした」と後を続けました。時代が流れ今はCDに。広報紙１冊は３時間以上になるそうですが、必要な所だけ聞けるなど、視覚障がい者にとっても利便性が向上しています。

必要とする全ての人へ届いてほしい

当時は、必要とする人を探すのにも苦労したそうです。「施術院を１軒１軒回り把握した人たちの家に、直接届けに行っていました」と池田さん。今では法整備などが進み、費用負担なく郵便で届けることができます。

「家族の協力もあり活動できています」とは、現在代表を務める西本さんの弁。そして皆さん口々に、「好きでなければできない」と続けました。うれしかったことを尋ねると吉田さんが、「利用者の方から『私は全て聞いているから、家族の中で町のことは一番知っている』と言ってもらえたこと」と話してくれました。

最後に、皆さん口をそろえて「ご家族が読み聞かせる時間も省け、本人も必要な情報が得られる。ぜひ活用してほしい」と話してくれました。

1 完成したCD。季節の風物詩などの絵が入ったシールは吉田さんの手作り

2 パソコンとマイクを使い各家庭で録音。聞きやすさを心掛けています

■広報紙などの音声を録音したＣＤが必要な人は、益城町社会福祉協議会（☎214－5566）へ

GAMADASHIMON